



OnAir 3000 / OnAir 2500 ユーザーレポート

株式会社中国放送 様

OnAir 3000-24F / OnAir 2500-18F

ラジオスタジオ4室をSTUDERで更新



株式会社中国放送
技術局 制作技術部
中島 俊明

4つのラジオスタジオ

弊社のラジオスタジオは、一番古いスタジオで1987年製、一番新しいスタジオでも1998年製でした。今回、ラジオマスターのシステム更新に併せて、全てのスタジオを更新することになりました。主に生放送スタジオとして使用している第1/第2スタジオと、主に録音用ですが、生放送にも対応できる第3/第4スタジオ、全部で4室です。これまでのスタジオはかなり昔の基本設計であり、録音番組やドラマ制作を主な使用目的とする思想で設計されていました。今回の更新では内装にも手を入れ、少人数でも長時間の生放送に耐えられるよう、機材は最小限とし、音声卓や機器のオペレート業務が簡単にでき、かつ快適に運用できることを重視しました。



STUDER

音声卓は、第1/第2スタジオにOnAir 3000を、第3/第4スタジオにはOnAir 2500を採用しました。音質の良さ、シンプルで分かりやすいインターフェイス、ワンマンや少人数でもオペレートできること、安価であること等が主な理由です。

弊社では、技術の専門では無いスタッフがオペレート（ディレクターが技術オペレートも兼務）することがほとんどなので、できるだけ複雑な操作や、触らなければいけないボタン・つまみを減らして、シンプルな構成にする必要がありました。その点でSTUDERの卓は、ユーザーフレンドリーなインターフェイスであると同時に、複雑なロジックを組むことができるのは魅力でした。特に少人数でのオペレートを考えた場合、周辺機器等との連携抜きには考えられません。操作卓面の機能を自由に割り振れることや、制御系の柔軟性は他に無い特徴であり、現場の要望に合った操作性を実現することができました。

マルチ画面を設置

壁面スペースを生かして、大画面のテレビモニターを設置、マルチ画面仕様としました。スタジオに窓を作ることができなかったため、マルチ画面で各拠点の情報カメラ映像を映し出

して、外の天候等、リアルタイムな状況が見える環境をつくり、話し手も様々なライブ情報を確認できるようにすることで、世の中の様々な動きを迅速に聴取者に伝えられることを意識しました。

運用開始から約1年

2015年11月から第1スタジオの運用を開始して、あっという間に約1年が経過しました。これまではアナログ卓を使用していたため、最初はデジタル卓への不安や抵抗感をもったスタッフもいましたし、全てのスタジオを短い期間で更新しなければいけない状況であり、無事に移行できるか非常に不安でしたが、短期間のトレーニングでスムーズに新システムでの運用に移行することができて、ほっとしています。また、第3/第4スタジオのOnAir 2500は、第1/第2スタジオのOnAir 3000とまったく変わらない操作性のため、使い易いところも好評です。

